

斎藤月岑・滝沢馬琴両家の生活にみる祭祀

高 牧 實

**The Household Religious Rituals in Early 19th Century Edo:
As Recorded in the Gesshin and Bakin Family Journals**_____

Saitou Gesshin, a precinct leader and municipal functionary, and Takizawa Bakin, an outstanding novelist, were both well-known Edo figures of the day. Both were also dedicated diarists, their journals providing us with informative historical records of the daily family life in Edo.

This paper focuses in particular on the festival and worship activities in the daily lives of the two families, such as the memorial services for ancestors, visits to their graves, the festivals for the popular household deities, the worship at shrines and temples for good health and fortune.

Gesshin emphasizes the pleasures of visiting shrines and temples, his especial favorite being the entertainments for the festive period when Buddhist images were ceremonially exhibited. Bakin and his family faithfully observed rituals of worship for such household deities as the Stars, *Daikokuten*, *Inari*, *Koushin*, and *Benzaiten*.

はじめに

都市江戸における生活に深くかかわる歳事については、17世紀末、近世中期の『江戸惣鹿子』のなかに記され、その後の数書にも記事が収められ、19世紀に入って、『増補 江戸年中行事』、ついで、『東都歳事記』というような、整った詳しい書物が出現してきた。そうした書物には、江戸における仏神事・祭礼の記事が圧倒的に多くみられる。

この江戸の歳事・祭祀・祭礼に関して、三田村鳶魚氏が諸書をまとめて『江戸年中行事』¹⁾を上梓され、朝倉治彦氏が『東都歳事記』を翻刻し校注を付され²⁾、研究を進めて来られた。さらに、西山松之助氏が、提唱される行動文化を検討されるなかで、齋藤月岑の年中行事を明らかにされ³⁾、また、宮田登氏が、都市民俗論を提示して、都市江戸の歳事を採り上げられる⁴⁾など、究明が行なわれてきている。

しかしながら、江戸の特定の町人が、どのような都市生活を営んでいたのか、その都市生活のなかでどのような祭祀を行っていたのか、ということについては、先記の齋藤月岑のほかには、滝沢馬琴について関説したものの⁵⁾があるものの、まだ、究明されること少ないのである。

そこで、江戸における特定の町人の都市生活のなかの仏神事の祭祀について、時期を同じくする齋藤月岑・滝沢馬琴両家を事例として検討してみたいと思う。馬琴家の生活の実態は町人のそれに近いので、その事例として採り上げる。

第1節 齋藤月岑家の祭祀

齋藤月岑は、市左衛門といい、月岑のほか、翟巢・白雲堂・松濤軒など

と号した。諱は幸成という。神田雉子町に住み、11番組の町名主をつぎ、青物御役所取締りなどの役職も勤めた。幼少の頃、漢学を日尾荆山、国学を上田八蔵、画を谷口月窓に学んだ。30歳前、天保4年(1833)に、祖父・父とうけついできた『江戸名所図会』の著作を終えて刊行し、同10年に『声曲類纂』を著わして弘化4年(1847)に上梓し、さらに、嘉永2年(1849)に『武江年表』(前篇)を出している(明治11年、1878年、後篇脱稿)。そのほか、「翟巢雜纂」「翟巢漫筆」「睡余操觚」「松濤軒雜纂」「武江扁額」「百戲述略」「見聞私記」「恐惶記事」「懼怕操筆」「江戸開帳搜索記」など、写本・稿本をつくり、幕府の御触書を集めて「類纂撰要」を編集している⁶⁾。月岑は、江戸の町名主などの諸役を勤める知識人・学者であった。

この月岑は、周知のように、日記を書き続けていた。天保元年(1830)から明治8年(1875)にかけての日記(うち9か年分欠)が残っている⁷⁾。月岑は、簡潔に摘記し、役務にかかわる事を重点に記しているけれども、月岑・家族の先祖供養の仏事、寺社祠堂・開帳参詣などについても簡記しているので、そうした記事を抽出しながら、月岑と家族が行っていた祭祀について採り上げてみたい。

月岑・家族が行なった祭祀については、森銃三氏が、周知の『斎藤月岑日記鈔』のなかで紹介しておられ、西山松之助氏は、月岑の年中行事について書かれるなかで採り上げられ、宮田登氏も要点を関説しておられる⁸⁾。月岑は、『江戸名所図会』『東都歳事記』『武江年表』などの著作にみえるように、江戸とその近郊の寺社祠堂における仏神事・祭礼については熟知しており、また、開帳についても、よくよく留意してきた。

まずはじめに、月岑の家族構成を日記⁹⁾のなかからみてみよう。天保2年(1831)当時、母ひさ、妻れん、男子久次郎(養子、普勝伊兵衛・月岑の姉の子、甥)、女子あさ、の4人であった。その後、女子はる・さき・つねが生れたが、あさ・はるは幼逝した。月岑は、久次郎を亀之丞と改名させ、天保14年(1843)3月に見習初を町名主組合へ披露し、4月の見習初願を

町年寄樽役所へ提出し、亀之丞は、弘化3年(1846)7月、江戸町会所の御救掛りに任命された。亀之丞は、町奉行所・町年寄役所へ出勤したり、父が出掛けていた寺社へ参詣したりして、父月岑の代り、跡継ぎとしての役割を務め始めていた。しかし、嘉永3年(1850)、てつと結婚して間もない7月19日に22歳で病死した。その後安政元年(1854)に妻れん、同5年に母ひさ、さらに10年経て、明治2年(1869)に、後妻まちが他界した。月岑は、跡を継ぐべき喜之介の成長を頼みとしていた。

さて、月岑は先祖供養の仏事をどのように営んでいたか、日記のなかからそうした仏事を抽出しよう。

月岑は、天保元年(1830)3月9日、父幸孝の13回忌を、菩提寺法善寺で客を招いて営んでいる。8月16日、祖母昌麗尼(採花院)の葬式を執り行ない、翌2年8月13日に1周忌逮夜、翌14日墓参を行なっている。11日に昌麗尼画像掛物が出来てきているので、森銑三氏は、祖父幸雄、父幸孝の画像掛物も、斎藤家にあったのではあるまいかと推測しておられる¹⁰⁾。この昌麗尼の仏事には、8月8日、料理人平五郎を呼んで法事料理を誂え、翌9日、仏事の饅頭を配り、11日渋谷村宝泉寺へ法事回向料100疋を平吉に持たせて納め、13日の1周忌逮夜には、飯塚(富山町名主)、普勝(小網町名主)、片岡(松永町名主)、安間(根岸御左官)という親類などを自宅に招いて法事料理を出し、14日、家族一同、普勝・遠藤(東湊町名主)に嫁いでいる姉二人ともども法善寺へ墓参している。

月岑は、この年10月4日に祖父幸雄の30回忌墓参(8月法事取越)、天保4年7月4日あさ1周忌、8月12日英兆童子33回忌、同7年8月14日昌麗尼7回忌墓参、同11年3月9日功宝院33回忌墓参、同15年2月1日松操院50回忌・幸孝27回忌(法事取越)墓参、嘉永元年10月4日幸雄50回忌墓参、同3年3月9日幸孝33回忌墓参、慶応2年(1866)昌麗尼37回忌、同3年3月9日幸孝50回忌の仏事を日記に録している。しかしながら、逮夜、法事料理、饅頭配りについては記していない。多くは墓参と記している。これらの年忌仏事をどのように営んでいたのか詳しくはわからない。

月岑は、命日・彼岸・盂蘭盆に営む年中行事としての供養の記事を殆んど日記に記していない。天保元年7月4日・翌年7月6日に、燈籠ができてきたことを記している。盆燈籠であろうか。同2年6月29日には、例年のように大燈籠を拵えた、と記している。盆の大燈籠であろうか。月岑は、家族一同とともに、盆供養を通例のように営んでいたのであろう。

つぎに、月岑の寺社祠堂・開帳参詣についてみよう。月岑は役務で多忙であったけれども、熱心に寺社祠堂・開帳に参詣していた。開帳の場所・期間については「武江年表」に記事を多く書いているように、調べもの好きもあって、洩れないように留意し、日記のなかの別枠に書き留めている。月岑の寺社祠堂・開帳参詣を、天保2年(1831)を例として表1に示してみた。先記の西山松之助氏が月岑の年中行事¹¹⁾のなかで明らかにされた参詣の分を参照しながら検討を進めよう。

正月2日浅草観音・待乳山聖天参詣、月岑の初詣。初卯亀戸天満宮社内妙義大権現参詣。5日浅草三社流鏑馬見物・参詣。10日虎門金毘羅宮参詣(毎月10日)。16日亀戸天満宮七十五膳見物・参詣。16日閻魔参り。25日亀戸天満宮うそかへ参詣。

2月初午日比谷・烏森稻荷参詣。初午、あるいは、二午自宅稻荷祭。15日涅槃会参り。彼岸会、六阿弥陀・三十三所観音めぐり。

3月15日梅若塚大念仏参り。17・18日浅草三社祭礼、参詣。

4月8日灌仏会上野法華堂、あるいは、茅場町薬師堂参り。17日雑司ヶ谷鬼子母神参詣、高田穴八幡宮境内高田宮参詣。

5月29・30・6月1日駒込富士参詣、ほかに、茅場町富士・柳原富士参詣。

6月5・7・10日、二の宮・一の宮・三の宮天王(神田明神社地内祇園社)御旅所参詣。

7月9・10日浅草観音千日詣(四万六千日詣)。13日王子権現祭礼・参詣。26日廿六夜待。

8月15日富岡八幡宮・深川八幡宮祭礼、参詣。

9月14・15日神田明神祭礼，参詣。

10月亥子，雑司ヶ谷鬼子母神参詣。

11月甲子，茶飯炊く。冬至・星祭，柳島妙見参詣。浅草観音・待乳山聖天浴油供参詣。11日八天宮団子供進・屋根散水，参詣。24日清正公参詣。

西山氏は，月岑が開帳（居開帳・出開帳）に，家族あるいは友人ともよく出掛け，出先の料亭で食事したりしていることも紹介しておられる。同氏が，月岑の参詣頻度の最も多いものとして，浅草観音と待乳山聖天の参詣，毎月10日の虎門金毘羅参詣をあげておられるように，月岑は熱心にこれら3か所の参詣をずっと続けていた。なお加えて，上野寛永寺開山堂の元三大師参詣も続けており，5月末の山開きに駒込富士へも参詣している。

月岑は，天保2年には，久次郎をつれて参詣すること11回にも及んでおり，緋縮緬を着せて疱瘡にかからないよう祈願したり，かかったあと回復したことの御札参りをしたりしている。そのほか，母や久次郎などと目黒不動・堀之内妙法寺などにも参詣したり，川崎大師参り，六阿弥陀参り，三十三所めぐりなど同伴者と一緒に出掛けている。両国・浅草，王子稲荷，茅場薬師などの開帳にも母など家族と参詣したりしている。しかしながら，月岑はしきりにひとりで参詣に出掛けている。月岑が，ひとりでの参詣を楽しみとしていた，と思われる。月岑の馴染の芸者が何人かおり，よく訪れる料理屋も数軒あった。

月岑は，役務上，山王・神田両祭礼に出役しており，八幡宮・天満宮・王子権現，三社権現，神田明神社地内祇園社の御旅所など，諸大社の祭礼に参詣している。諸大社への参詣にも留意しよう。

山王・神田両祭礼については，別稿¹²⁾で採り上げたけれども，月岑がどのような役務を勤めていたか，家ではどのような祭礼の営みを行っていたか，について日記から採り上げよう。山王権現社祭礼については，町年寄役所からの呼出しに出勤，その後，茅場（高麗屋）などの祭礼寄合出席，祭礼前日の町年寄衆見廻り同道，町々の練物など見廻り，祭礼日，早

朝からの山下門・半蔵門出役，翌日山王権現社へ御礼参詣などを行なう。陰祭りには出役しない。

神田明神社の祭礼については，西山松之助氏がその執行に関して詳述しておられる¹³⁾。月岑は氏子町々の町名主の1人であったから，祭礼にかかわる重い役務を勤めていた。天保2年の事例に，同4年・6年・10年などの事例を加えて，その役務を見よう。六月上旬，その担当町年寄役所から祭礼についての呼出しを受けて同役所へ出勤する。祭礼掛りの町名主数人が任命される。祭礼掛り町名主は，氏子町々・祭町から出す祭礼行列にかかわる総務を担う。月岑は，天保6年，10年などの祭礼掛りに任命されている。祭礼の準備のため，鍛冶町の山吹などで，祭礼掛り・祭町の行事が祭礼寄合をもち，その年の付祭を出す町々（3か町）の鬮引（入札）を行ない，付祭の町々の地主・家主・請負人を呼び，付祭の出物の企画を出させる。天保4年には，付祭の請負人と思われる徳左衛門・踊りの師匠坂東まん・唄のさとみ太夫，踊りの師匠がつれて来た女5人が知られる。同10年には，永富町祭礼請負人の喜美蔵が，唄を浄瑠璃語りの豊前太夫に変更してきたので，祭礼掛りの月岑は，変更による請負金額の増金を認めない旨を伝えている。なお，同12年には，本所元町の人形師目吉が，女人形制作を金6両で請負っている。月岑が描いた絵によれば，その祭礼人形は，中に人が入って穴からのぞきながら歩く仕組みのもので，背の高さ9尺であった。祭礼掛りは，祭礼に出る若い者から，秩序を乱さない旨の誓約書・請印を取る。祭礼寄合に，祭町の祭礼仕様書上を持寄り，祭礼番附，付祭仕様，祭礼芸人名前，衣装など詳細な書上をまとめて，担当の町年寄役所へ提出する。そのような仕様書上については前記の別稿でみたところである。祭町の準備の下見，祭礼衣装改め，祭礼道筋・祭礼棧敷の下見，町年寄の見分見廻り同道などに出勤する。町年寄役所での衣装改めを受け，祭礼のための扇・手拭の作製を点検し，祭礼前の練物・踊り・曳物などを見分したりして万全を期す。夜宮の日の祭礼行列，祭礼日の祭礼行列に，早朝から田安門に出役して詰める。付祭付添となった町名主は，付祭

に同行する。祭礼掛りは、祭礼行列に付添う八丁堀同心衆を支度のために自宅へ迎えたり、見分する町年寄衆を自宅に迎えたりする。滞りなく祭礼が済むと、翌日の午前中に八丁堀同心衆・町年寄衆へ麻袴を着て御礼の挨拶に廻り、午後、着流しに着替えて神田明神社へ御礼参詣する。その後10月にかけて、祭礼入用についての寄合を重ね、入用割、集金、配分を行なう。時には、天保10年、新石町が異議を申立てて祭礼入用の拠出を拒否した事例のように、祭礼掛りの役務が翌年にまで及ぶこともある。

このように、月岑は、町名主として山王祭礼に出役したり、町名主、あるいは、祭礼掛りとして、神田祭礼に重い役務を勤めて、一段と多忙であり、祭礼日には家族とともにいることも出来なかった。家族とともにいることができるのは陰祭りの折であった。氏神神田明神社の陰祭りには、家で家族とともに祭礼の行事を営んだりしていた。例えば、天保9年9月14日、陰祭りの夜宮の日、自宅に客を招いている。小網町名主で姉が嫁いでいる普勝、加賀町名主田中、麻布宮下町名主深見、吉村、三河屋利介を招き、両国の武蔵屋の芸者さく、上総屋の芸者もと、前記のさとみ太夫、女師匠2人、町内(雉子町)の家主善蔵、直吉、同じく家主と思われる半九郎、小網町の叔母、普勝の娘(姪)2人も加えての宴を催して楽しんでいる。同11年の陰祭りの夜宮には、芸者もと・つるを呼んでいる。宴の料理の詳細はわからない。月岑の家では、そうした宴に、母ひさ、妻れんは働いていたのであろう。陰祭りの日、月岑は神田明神社に参詣している。母ひさ、妻れんは同道していない。天保15年の陰祭りの記事はみられない。弘化3年には、月岑は陰祭りの夜宮の日と翌祭礼日に神田明神社に参詣している。しかしながら、母・妻は参詣に同道していない。

このように母・妻が参詣に同道していないことは、陰祭りの家での宴の持ち方、家の当主と母・妻との間の家のなかにおける立場の差異を示唆しているように思われる。祭礼の運営にかかわるものとして、月岑の日記のなかにみえるのは、町名主、町の月行事、地主、家主である。祭礼行列に女性の芸人が出ているのは、華やかさを行列に加えるものとして運営にか

かわるものが仕組んだものである。運営にかかわるものは、祭町の社会、町内の構成員（構成員の家の当主）である。その社会は、男性を中心とするものである。月岑、跡継ぎの久次郎が、神田明神社をはじめ諸大社に参詣しているのに較べて、母ひさ・妻れんが諸大社に参詣することは少ない。諸大社が、当時、そのような社会の特質、在り様を基盤としていたことを示唆していると思われる。

なお、月岑は、自宅内に稲荷を祀って稲荷祭を行っていた。ほかに、日記には、巳待・庚申・亥子と記しているけれども、それらの祭をどのように行っていたのか記していない。熱心に行っていたようにはみえない。

ところで、西山松之助氏は、月岑の開帳参詣について、月岑は、特別かたよった神仏信仰を持っていたのではなく、どんな場合にも出掛けており、信仰というよりは利生につながる面、レクレーションになった面を求め、当時の江戸の人たち一般の心理と同様、大衆芸能と密接につながった見世物を楽しんでいた、と述べておられる¹⁴⁾。確かに、月岑は、寺社祠堂参詣、開帳参詣を、特別な信仰を持って行っていたというよりは、多くの人々と同様の信仰（世俗信仰）でもって、縁日、法会、祭礼、開帳に出掛けて参詣し、その折の出店・見世物、大衆芸能を楽しみ、また、調べものの好きの気持を満足させていた、と思われる。

それでは月岑の母ひさと妻れんについて日記から摘出してみよう（表2）。天保2年には、正月28日、母、孫久次郎をつれて薬研堀不動に参詣、3月5日、母、赤羽水天宮に参詣、5月8日、母・妻、久次郎とあさをつれて浅草寺仁王尊の股くぐり、6月22日、母、久次郎をつれて本銀町千手観音に参詣、7月11日、母・妻、久次郎をつれて外神田蠟燭町金毘羅参詣、10月14日、月岑・普勝両家族、堀之内妙法寺参詣、月岑も参詣、25日、母、妻の願解きに妙法寺参詣、とみえる。

前年の元年には、3月22日、祖母・母、法善寺開帳参詣、28日、母・妻、法福寺と薬研堀不動参詣、閏3月24日、母・妻、日本橋西河岸地藏参

詣、4月18日、母、法福寺・真先稻荷参詣、7月16日、母、深川の寺参り（弁慶橋祖母3回忌）、24日、母・姪、法福寺・日本橋西河岸地藏参詣、10月18日、母・姉、雑司ヶ谷鬼子母神参詣、の記事がある。

その後の天保年間についてみれば、月岑がしばしば母を同伴して参詣しているけれども、母がひとりで出掛けたり、れん・久次郎と、あるいは、他家へ嫁いだ娘（月岑の姉）・外孫と出掛けたりしている。母ひさは、殊に5日の縁日に赤羽水天宮へ参詣している。月岑が10日の縁日に虎門金毘羅宮へ出来るだけ欠かさないように参詣していることに相応している。母ひさがよく参詣したのは、水天宮のほか、薬研堀不動、日本橋西河岸地藏、雑司ヶ谷鬼子母神、白銀町千手観音、浅草寺、待乳山聖天宮などであり、さらに回向院などでの開帳であり、いうまでもなく、菩提寺の法善寺・墓所であった。

母ひさは、稻荷社・砂村八幡宮・高田穴八幡宮・神田明神社に参詣しているけれども、極めて稀に参詣しているに過ぎない。そのほかの諸大社へは殆んど参詣していない。

母ひさが、家族と一緒に参詣しているのは、前記の堀之内妙法寺などである。回数は少ない。天保14年閏9月6日、月岑・亀之丞、外孫ちか、書役の娘わき、直三郎、清助と、同15年9月25日に、月岑・亀之丞、はる、外孫こと・とわと一緒に目黒不動に参詣している。月岑につれて行って貰ったのである。同2月28日には、叔母、はると一緒に、浅草から亀戸へ参詣している。開帳にも参詣したのであろう。嘉永4年（1851）11月6日に、れん、りんと茅場薬師堂へ、11日に、娘（月岑姉）と目黒不動へ参詣している。その後次第に参詣しないようになった。高齢となっており、安政5年（1858）9月に他界している。遡って、天保11年4月7日、叔母・久次郎・むめと一緒に、小網町番人和介を同伴して、信州の善光寺参詣に出掛け、16日に善光寺に到着、5月6日に無事帰宅している。善光寺詣をも果していた。

妻れんは、姑ひさほどには出掛けていない。亀之丞が嘉永3年（1850）

2月14日に嫁をつを迎えた後も、あまり出掛けていない。同6月28日、月峯が母ひさ・さき・いね、隣家のきんを同伴して湯嶋天神・池之端弁才天へ参詣しているが、れんは同道していない。れんは、遡って同3月10日に飯倉熊野横丁の老婆の加持祈禱に、7月22日に安達一成の占に、26日に飯倉の加持祈禱に行っている。29日に亀之丞が他界している。亀之丞の病状が思わしくなかったのであろう。亀之丞死去後、まだ、忌が明けない時期、8月11日に赤坂豊川稻荷・熊谷稻荷に参詣し、法善寺に慕参している。10月9日には、姑ひさ、息子喜之助と雑司ヶ谷鬼子母神に参詣している。姑れんが縁日に水天宮へ参詣したような、格別の参詣に出掛けることも行っていない。諸大社へも殆んど参詣していない。

家の当主である月峯・その跡継ぎの亀之丞と、月峯の母ひさ・妻れんは、同様の世俗信仰をもって、共通の寺社祠堂・開帳の参詣を行っていたけれども、家事と育事の役割を担って、母ひさ・妻れんは、当主の月峯ほどには出掛けず、妻れんは、姑ひさほどには外出しなかった。また、当時の社会の特質・在り様、それと深くつながる家のなかの立場にも制約されて、回数多く家をあけて参詣したり、また、その折に娯楽・楽しみを求めたりすることは控えなければならなかったに違いない。

第2節 滝沢馬琴家の祭祀

滝沢馬琴の生活については、早くは、饗庭篁村氏編・芳賀矢一氏ほか7人論評『馬琴日記鈔』、関根正直氏の『からすかご』のなかの「曲亭馬琴の家庭及び生活」¹⁵⁾に紹介されており、真山青果氏の『隨筆滝沢馬琴』¹⁶⁾、麻生磯次氏の『滝沢馬琴』¹⁷⁾、に詳しく書かれている。ほかに、小池藤五郎氏の「手紙・日記・家記の検討による滝沢馬琴の周辺」上・下、柴田光彦氏の「馬琴の日常生活」がある¹⁸⁾。滝沢家の祭祀については、柴田光彦氏が「滝沢家『盆祭諸行事』」¹⁹⁾で、史料「盆祭諸行事」を紹介され、馬琴の日記にみえる盆供養の記事を抄出され、菩提寺・法名を日記の記事から

拾い出されている。高田衛氏は、「八犬伝の世界」²⁰⁾終章に、滝沢家の星祭を採り上げられている。

このような成果を参照しながら、馬琴とその家族が、どのような祭祀を行っていたのか、さらに検討を重ねてみたい。周知の馬琴の日記²¹⁾を史料として使用する。天保2年(1831)の日記を中心として検討する²²⁾。馬琴は、非常に几帳面に詳しく日記を書いているので、馬琴・家族が営む祭祀を、前記の齋藤月岑の事例より詳しく知ることができる。

まず、天保2年当時の滝沢家の家族についてみよう。馬琴は、著作『吾仏乃記』²³⁾に、先祖から当時までの滝沢家の系譜を記しているので、その記事に依拠することとする。当時、馬琴は、妻百、長男宗伯、その嫁路、孫(男子)の太郎、孫(女子)の次、と一緒に神田明神社の下の同朋町に住んでいた。同4年に孫(女子)さちが生まれている。馬琴の娘の幸の婿清右衛門が飯田町の家(伊勢屋・会田氏)を継いでおり、祐は田辺久右衛門(四ツ谷)に、鍬は渥見覚重(宇都宮藩医師)に嫁していた。馬琴の妹の蘭(秀)は武士の崎山伊総治に、菊(芳)は、武士の田口久吾に嫁し、のち蘭は離婚した。

滝沢家の初代覚伝は、最上義光家臣であったといい、馬琴の父興義は、旗本松平信成(松平伊豆守信綱の子孫、1,000石)の筆頭家臣であった。跡継ぎの長兄興旨(羅文)は戸田忠諫などに、次兄興春は高井土佐守に仕えたりしていた。馬琴は、深川の松平家屋敷で生まれて育ち、兄興旨のもとにいたり、諸家に仕えたり、流浪したりしたのち、山東京伝のもとに身を寄せ、葛屋重三郎(耕書堂)のところで働き、葛屋の世話で、飯田町の下駄商伊勢屋に入塾し、作家として世に出て、筆料などで生計を立てるようになっていた。長男宗伯が医師となり松前家に仕えた。馬琴は、宗伯を同朋町の家に移居させ、長女幸に嫁を迎えて伊勢屋を継がせ、同朋町の家に移っていた。かくして、馬琴は、天保2年当時、妻百、宗伯・路夫婦、孫の太郎・次と一緒にいたのである。その後、天保6年に宗伯が他界すると、翌年、孫の太郎のために御家人株(鉄砲組同心)を買い、その株につ

いていた四谷信濃坂の家に移った。馬琴は、伊勢屋に入贅したのちも滝沢の姓を称し、太郎の御家人株を買うなど、下級ではあっても、武士の身分であることを意識していた（文政12年8月8日、終日、馬琴は、刀・脇差に風を入れて拭き手入れしている）。同朋町の家地主は、はじめ西丸御書院番橋本喜八郎、のち御勘定御普請役杉浦清太郎であったけれども、馬琴は、対等の者として振舞っていた（遡って、文政10年春、宗伯の結婚・くわ（獄）の結婚の相手、その折々の対応の仕方にも、その意識がよく見てとれる）。

浜田啓介氏は、「都市生活と家—『吾仏乃記』における家の問題—」²⁴で、滝沢家の勤仕歴などを検討して、滝沢家は、用人階級であり、婿養嗣入り・能力・伝手によりながら、良い条件を求めて主家を転々とし、養子先をも転々とし、流浪したりするなど、不安定な生活を送り、身を寄せあって生きていく方便として家を守り、嗣を守り、横の婚姻関係を結び、主家の邸内居住、勤仕、門限、服装など町人とは別の暮らし方をしていた家であり、町方の自治とは法制上全く無関係であるが、市民的であり、実態はかなり市民というに近い家であった、と理解されている。参照すべき見解である。

馬琴は、伊勢屋に入ったから、町人が構成する町の成員となって町方の自治とも関係あるべき立場にあったこともあるが、伊勢屋に婿を入れて同朋町に転居してきて、町方とは関係のない土地に住み、大名に医師として仕える家の当主・宗伯のもとで、下級の武士の家格を意識し続けていた。しかしながら、生活の実態は町人のそれに近いものであった。

では、滝沢家の祭祀のうちの仏事についてみよう。柴田光彦氏は、前記の論考²⁵のなかで、盆供養の記事を馬琴の日記のなかから逐一抽出して、滝沢家がどのような供養の営みを行っていたかを紹介しておられる。さらに、馬琴の兄羅文居士（興旨）が記し置いたという盆祭諸行事も翻刻して紹介しておられる。霊棚の作り方、迎え火、供物、14日の膳部と供物、深光寺からの僧に進める布施、15日の供料、16日の供料、霊棚撤去、送り火、深光寺への盆供届物、慶養寺への盆供の届物を記したものである。亡

き母が営んできた盆祭の行事を、5人の子が集って確認し、忘れないよう記し置く、ということであるから、滝沢家が営み続けていた盆祭の行事である。その営みを続けていたことを馬琴の日記で確認できる。

柴田光彦氏は、加えて、日記の記事を逐一あげて、滝沢家一族の菩提寺の一覧と法名の索引を作成しておられる。それらの日記の年月日付の一覧の数が多きことから、仏事の営みの多きことを知ることができる。つまり、滝沢家は、先祖の年忌仏事というに及ばず、祥月命日の仏事、毎月の命日、ことに、馬琴の両親（興義・もん）成正居士・恵正尼の毎月の命日の仏事を営んでいた。母方の供養、妻方の供養も営んでいる。

少々遡って、文政10年の霊棚飾りなど、例年通り宗伯が行なっているけれども、宗伯は、家君（馬琴。宗伯は父を家君と代筆の日記に記している）が病気であったので、迎え火を名代として勤めた、と日記を代筆して記している。同11年には、宗伯が病気だったため、馬琴が、盆棚飾り、惣位牌移し、迎え火などを行なっており、翌12年には、宗伯が盆燈籠張替、霊棚飾り・家廟移し、取り納めなどを行なっている。当主宗伯は、家君の名代として勤めるという意識をもって、執り行なっていたのであろう。

馬琴は、「吾仏乃記」に、滝沢家一族とその縁類についての諸記録を追い求めて、それぞれの生涯、生き方、法名、菩提寺、墓碑銘、過去帳の記事など詳細に書留め、作仏・墓碑建立・遠忌仏事などを記し、滝沢一族の詳細な家譜を記して、先祖からの血脈を正し、先祖崇敬の意を表したものである。このように、滝沢馬琴家は、先祖崇敬の丁重な祭祀を営んでいた。先にみたように、江戸の由緒ある旧家斎藤月岑家が先祖崇敬の年忌仏事を営んでいたけれども、滝沢馬琴家では、一段と丁重な祭祀を営んでいたといえよう²⁶⁾。

つぎに、寺社祠堂参詣についてみよう。天保2年（1831）の日記から、馬琴・宗伯、妻百・嫁みちほか、に分けて抽出する。表3に示した通りである。馬琴自身は、執筆・挿絵かき・校正などに追われ、さらに収書、写本校合、読書、加えて、家計の収支とその記帳を行なうなど、極めて多忙

な日々を送っていて、あまり外出していない。3月26日、亡き父成正居士の祥月命日に、妻・孫を相駕籠に乗せて、茗荷谷の菩提寺深光寺に墓参し、そのあと、自宅近くの神田明神社に参詣し、また、孫の太郎をつれて近くの妻恋稲荷に参詣した。これが日記に記するように、馬琴の初詣であった（翌天保3年には2月27日、百・太郎と深光寺墓参などが初めての外出）。4月16日、太郎をつれて飯田町の清右衛門方へ年始に行き、近くの世継稲荷に参詣した。5月5日、宗伯同道して赤羽水天宮へ参詣し、6月5日、太郎と次をつれて、神田明神社へ行き、社地の天王二の宮神輿の御旅所への神幸に参詣、見物した。6月27日、亡き母恵正尼の祥月命日に、妻と深光寺へ墓参した。7月11日、妻と一緒に太郎をつれて、母方外祖母の墓参（今戸慶養寺・浅草西照寺）・盆供施入を例年通り行ない、浅草観音にも参詣した。翌12日、亡き叔母（母の妹）の墓参（池之端七軒町福常寺）をして香奠を納め、13日、深光寺に墓参、8月11日、長兄羅文居士祥月逮夜の日、深光寺に墓参した。11月5日、宗伯と同道して赤羽水天宮に参詣した。この年、5回墓参、2回神田明神、2回稲荷、2回水天宮に参詣しているに過ぎない。馬琴は、花見・芝居見物など楽しんではいるが、娯楽を求めての参詣を殆んど行っていない。

家の当主である宗伯は、滝沢家に加えて母（百）方、妻（みち）方の墓参なども行っている。ほかに、神社祠堂にも参詣している。宗伯は、父か母と同道、あるいは、ひとりで、5日の縁日に、赤羽水天宮に参詣している。17日の縁日には、溜池上八天狗神に参詣している。正月の初詣に、神田明神・築土明神・妻恋稲荷に参詣し、9月の神田明神祭礼には、飯田町の清右衛門方に止宿して、妻子とともに、また、四谷の姉夫婦とその子供とともに、祭礼行列の見物を楽しんでいる。1月28日、姉さきと同道して三田不動に参詣し、加持祈禱する老女からお告げを受け、2月8日彼岸中日、そのお告げ通りに回向している。5月24日に、母・姉さきと同道して堀之内妙法寺に、10月14日、母・妻子と深光寺墓参・雑司ヶ谷鬼子母神に参詣している。参詣回数は多くはない。宗伯は医師として松前家に勤仕

しており、また、病弱であった、ということにも留意しよう。さらに、馬琴が諸事発注、家計収支とその記帳を行ないながら、きわめて質素儉約の生活を送っており（天保3年3月11日、馬琴は、近年、勝手向経費が多過ぎる、儉約するよう嫁みちを戒めている）、馬琴、宗伯ともども、娯楽を求めての参詣を行なう、ということも窺えないのである。

馬琴の妻百は、馬琴より年長で70歳に近い当時、ひとりで遠出することは控えていたと思われる。仏事・墓参のほかには、1月5日、5月5日、8月5日、宗伯と同道（5月5日馬琴・宗伯同道）して、赤羽水天宮に参詣、2月17日、施食縁日世話人講中となっていたさき、宗伯と同道して本郷観音に参詣、5月24日、宗伯・さきと同道して堀之内妙法寺参詣、5月28日、宗伯夫婦・孫・下女と正木稲荷に参詣、10月14日、宗伯夫婦・孫と深光寺墓参のあと雑司ヶ谷鬼子母神に参詣、11月12日、太郎をつれて、広沢寺に墓参（さきの旧主立花家夫人）したあと、浅草観音・鷲大明神に参詣している。7月9日、さきの出迎えに同道して、四谷田辺久右衛門夫婦とその子供（外孫）と一緒に、神田川から隅田川など、屋根船に乗せて貰って、亀戸妙見・浅草観音に参詣し、終日舟行、送られて帰宅している。終日、楽しく過して冥利と感じたに違いない。孫をつれて近くの妻恋稲荷に参詣したり、神田明神に参詣したり、前記のように、飯田町清右衛門方に止宿して、賑々しく祭礼を見物している。

宗伯の妻みちは、ひとりで参詣に出掛けることが殆んどない。4月21日、太郎・次をつれて、自宅近くの神田明神の講中太々神楽の折に参詣しているに過ぎない。遠出もしていない。宗伯、あるいは、姑百に同道して参詣に出掛けているけれども、あまり出掛けていない。5月28日、百・宗伯に同道、太郎・次をつれて正木稲荷に参詣、9月9日、百に同道、太郎・次をつれて、自宅近くの妻恋稲荷・神田明神に参詣、同15日、百に同道、太郎・次をつれて、神田明神社内の大黒天に参詣、同20日・21日、百に同道、太郎・次をつれて飯田町清右衛門方に止宿して、神田明神祭礼を見物、10月14日、百・宗伯に同道、太郎・次をつれて、深光寺墓参の折に雑

司ヶ谷鬼子母神に参詣しているに過ぎない。滝沢家の嫁も、家事・育児に多忙で、外出・参詣を控えていたのであろう。このみちは、周知のように、馬琴の晩年、目の見えなくなった馬琴の口述を筆記して、その著作を助けている²⁷⁾。

このように、滝沢家でも、姑は嫁よりは参詣に出掛けているけれども、斎藤月峯家同様、女性はあまり出掛けていない。ことに、嫁はわずかにしか出掛けていない。

ところで、滝沢家は開帳にあまり参詣していない。開帳参詣については、文政10年3月23日、馬琴が宗伯と同道して、浅草観音に参詣し、小梅中村仏庵方へ行ったあと、牛嶋開帳に参詣、4月14日、百・宗伯・さき・みちが浅草観音開帳・牛嶋牛御前開帳・新寺町日蓮開帳・東坂下稻荷開帳に参詣していることが知られる。翌4年4月13日、深川八幡社頭での成田不動開帳参詣に、家内一同、下女しまをつれて出掛けている。同所に、下総葛西領某寺客人明神の開帳があり、帰路、洲崎弁天・本所正木稻荷参詣、両国回向院での下総岡田郡羽生村法隆寺本尊・かさね・解脱名号などの開帳、深川浄心寺の某寺日蓮祖師開帳にも参詣している。同5月12日、さきが浅草観音地内聖徳太子開帳参詣に母百をさそって、太郎・次をつれて出掛け、浅草観音に参詣している。以上のような開帳参詣が知られるけれども、馬琴は日記に開帳の催しについて殆んど記していない。天保3年5月5日、百が、みち・次・下女むらをつれて、妻恋稻荷・湯嶋天神に参詣し、上野山王山へ行き、終日遊山して帰宅したり、同4月17日、下女奉公人がいなくて、みちに家事に格別骨折した賞として、堺町芝居見物をさせようと宗伯に申付け、家内一同・太郎・次と出掛けさせたり(宗伯口痛延期)、同5月17日、太郎の望みを容れて、神田明神社地の花相撲(札銭150文、小児72文)を、宗伯・さき同道して見物させたりしているが、滝沢家では、花見・神田祭見物などのほかに遊興することが少ない。

なお、諸大社の祭礼にも出掛けていない。滝沢家は、幼い太郎・次に祭礼行列のほか、同社地の祇園天王の祭礼を見物させたりしているけれど

も、住んでいる所は、神田明神や祇園社の氏子町ではないから、祭礼には参加しない。氏神として祀っていない。近から神田明神・社内の大黒天に参詣しているけれども、そのほかの諸大社には、殆んど参詣していない。宗伯が築土明神に初詣している。飯田町の氏神であるから、竜門寺墓参のついでに参詣しているようである。

滝沢家が、自宅で営んでいた祭りは、庚申祭、星祭、甲子大黒祭、巳待弁天祭、天王祭、稻荷祭である。

1月6日、3月7日(失念と記す)、5月9日、7月10日、9月11日、11月12日の庚申祭に、例の通り、献供・燈明をあげている。文政12年5月27日の庚申祭に、神像画を掛けていたことを記している。

1月9日、5月14日、9月18日、10月19日、11月20日、12月20日、星祭、例の通り、献供して家族一同拝禱している。日記には、星祭にいつも家族一同拝禱する、と記されている。文政11年5月26日・天保3年8月27日の星祭りに、病気の宗伯の名代として妻みちが拝礼しているが、いつもは、宗伯が執り行なって一同拝禱していた。しかし、同10月29日の記事に、下女かねが子供(養子に出した)の死亡を知って深く悲しんでいたの、明日の星祭を12月1日に行なうよう、馬琴が家族に申付けていることがみえ、家君が家族に指示して営んでいたことが知られる。星祭りの献供は、例えば、天保3年6月26日、神酒・備餅・水・茶・昆布・すめ・梅干などであった。

1月10日、5月12日、7月14日、9月14日、11月16日、甲子大黒祭、献供・神燈をあげて祭り、宗伯が、母を同道したりして、神田明神社地内の大黒天に参詣している。同大黒天に多くの人々が参詣しており、天保5年7月1日、百が太郎をつれて参詣した折、人々群集していたため、鳥居前から引き返してきたこともあった。献供は、7月14日の記事にもみえるように、七色菓子である。文政11年3月25日の記事によれば、大黒天を家内3か所に祀っている。天保3年の冬至祭にみえる神棚3か所と同じであろうか。

1月14日、3月15日、5月17日、7月18日、9月19日、11月20日、巳待弁天祭、宗伯が献供して祭りを執り行なっている。文政12年3月19日、宗伯は、弁天拝禱中であつたので、太郎をつれて来宅した土岐村元祐に對面していない。宗伯は、文政10年6月24日の弁天祭に、風雨のため江の嶋への参詣を延期し、献供を二品増して、家内一統で祈念したり、同9月26日、江の嶋参詣に出掛けて留守したので、妻みちが家君の命をうけて献供して奉祭している。宗伯は、よく江の嶋へ参詣している。11月1日吉日吉辰、押入に祀っていた弁才天の大厨子を東三疊間辰の方に移しており、大厨子に祀っていたことが知られる。1月18日、江の嶋岩本院から祈禱札が届けられ、6月1日には、江の嶋弁天堂建直しの勸化帳が廻ってきたので、金一朱を寄進している。7月2日には、金華山弁天旅所から祈禱札が届いている。

ほかに、2月10日初午宵宮、人手不足のため参詣を取り止め、翌11日に、自宅屋敷に祀る稻荷社に絵馬を奉納している。文政10年2月12日の初午には、宗伯が、幟・挑灯を飾り、赤飯・神酒などを献供し、翌日、宗伯が幟・挑灯を取り納めている。宗伯が万事執り行なっていた。天保3年2月3日、宗伯が庭の祠を掃除し、幟・挑灯、太鼓などを出し、赤豆飯を献供し、夜五時(8時)に神前の挑灯の火を点し、妻みちと交替で見守っており、翌4日(午)、赤強飯・煮染・鮭魚・備餅・神酒を献供し、馬琴と宗伯が拝禱し、家内終日茶断ちして、夜五時に火を点している。3日には、清右衛門が神前の小蠟燭を持参し、太郎をつれて妻恋稻荷へ参詣している。内祝として、清右衛門方へ赤豆飯・平・ひたし物などを送っている。稻荷祭を丁重に営んでいる様子が知られる。

3月15日、天王祭を行ない、宗伯が献供している。11月19日には、冬至の祭・祝儀を営んでいる。文政10年11月5日の冬至の日には、北辰祭・諸神祭、献供拝礼を例年通り行なっており、陰陽道家土御門家の江戸の從臣浅野正親方へ星祭初穂を納めている。なお、天保3年11月14日、浅野正親に星祭初穂を例年のように納め、この年から太郎加入、八字年月を記して

提出している。節句ごとの祝儀を祝い、諸神・家廟に献供しているけれども、七夕星祭りには、俗に従って、短冊竹を出している、と特記していることが注目される。

前記の斎藤月岑家にくらべ、滝沢馬琴家が諸祭祀を熱心に営んでいたのである。

1月2日、12月27日、伊勢内宮御師の八幡太夫の使の者が御初穂を受け取りに来ており、12月11日には、外宮御師の岡村又太夫から大祓・新暦・熨斗などが届けられている。9月9日には、金彦山別当所から祈禱札が届けられている。8月15日の八幡宮祭礼には、例の通り、鎌倉・深川両八幡宮に神願をかけ、神酒・供餅を献備している。そうした御札も祀っていた。

水天宮へ参詣していたのは、安産祈願もさりながら、病魔退散などを祈願し、御札・神符をいただくためであった。8月14日、馬琴は、みち・太郎・次が、食あたりによるものか、食欲なく、さしこみ、嘔吐、腹痛に苦しんだので、水天宮の神符をいただきせ、また、宗伯が強い痢症を起したので、辛じて鎮めて神符を吞ませている。12月3日、次が熱湯で右足の膝から甲にかけて大火傷をして疼痛に啼哭していた折に、へちまの水をかけ水天宮御札を張らせている。効かなかったと記しているが、御札の神力が傷を治癒してくれるものと信じていた。

観音品も病気を治癒する力があると信じていた。2月18日、宗伯は持病の口痛に苦しんでいた。含薬・灸治などで手当したが、煩悶の声を発していた。そこで、馬琴は、お経の観音品（法華経普門品第二十五観音経）を出してきて、下の方へ打ちつけて、おさまるように願った。宗伯の口痛はおさまらなかつた。それでもなおその力を信じている。10月20日、宗伯が口痛にうめき続けたので、馬琴は、観音符を吉方甲の方に打ちつけて、例の通り、修法した。応驗あつてか、しばらくしておさまった。翌21日、またまた口痛、馬琴は、観音符を念唱し、錠を加えると、口痛が少々やわらいだ。22日、口痛甚しく、馬琴は、観音符に錠を加えて念呪、当月、卯の方

天道甲天・月徳三合、当年、卯の方大歳ながら吉星聚合、そこで、その夜から東三疊間に宗伯を寝させ、丙空利方を枕にさせた。宗伯の口痛がやわらぎ、翌23日には発らなかつた。馬琴は、吉方に移した験か、と日記に記している。なお、宗伯は医師であり、飯田町宅では売薬も営んでいたので、文政12年6月13日、暁方、口痛の苦痛甚えられず、看病していた母百・妻みちが宗伯自製の煎薬を飲ませているけれども、大いに念呪に頼っていた。

宗伯は、1月28日、さきを同道して三田不動に参詣し、老女に加持祈禱を頼んでおり、2月8日、彼岸中日、その老女の指図通り寺参りして無縁仏や縁類の菩提の回向を頼んでいる。8月、百の頭痛治癒のため、金沢町加波山行者に一めぐり7日の加持祈禱を頼んだ。7日目の16日、百の頭痛も大かた快くなった、という。自宅での7日間にわたる加持祈禱を頼んでいるのである。

馬琴をはじめ、家族ともども、呪力を信じていたことが知られる。馬琴は、また、当時、関帝籤によって吉凶を卜していた。宗伯の口痛をおさめようとして卜しており、また、7月17・18両日の大風で庭の葡萄棚が破損すると、棚の取払い、庇の修覆にも吉凶を卜して、その後、21・22日に植木屋に差障りない程度の繕いをさせている。柴田光彦氏が、「江戸の知識人と占い—馬琴と方位・吉凶をめぐる—」²⁸⁾のなかで、馬琴は、宗伯とみちの縁談、墓碑の建方、根岸への転宅取消し、孫の命名などを卜して決め、「陰陽五要奇書」を熟読し、わかり易い「方位宅相手引草の書」を著わして出版しようとしたり、諸書を集めて読んで「迎福南鍼録」を執筆しようとしたりした、ことを紹介しておられる。なお、根岸へ転宅しようとした折、文政12年9月15日、関帝画像をかかげ焼香して卜しており、関帝画像を持っていたことも知られる。馬琴は、「吾仏乃記」²⁹⁾家説第三のなかで、関帝籤で吉凶を卜して一事も虚籤なく、関帝籤を深く信ずる、と記している。「家説第四・全七 方位選択論」に、吉凶卜、星祭など、庶人の理に闇い惑いであり、庶人は、方位時日の吉凶を撰ぶよりは、謹慎を旨と

して驕らず実義をもってあたるべく、理、自然、天授に従うべく、慎を徳目とすべきであるといひ、そのことを子孫のために記す、とも書いており、「後の爲の記」³⁰⁾の末尾にも同趣旨のことを書いている。

なお、馬琴は京都の陰陽道家の土御門家と交流しており、文政10年閏6月から7月にかけての病気の折、平癒応験の法として星祭り・栗樹の修法を江戸の従臣浅野正親からすすめられて、星祭修法料・栗字修法料・栗丸太料（1本打込・49植）を納め、御札・御供米を受け取っている。同家から書籍を借りたり、屋代弘賢から「丁亥良命八位之書付」「古易病断」を読むようにすすめられて借りたりしている。

高田衛氏は、馬琴が、妻恋稻荷・神田明神の初詣を欠かさない、伊勢講にお初穂代を払い、先祖の命日ごとに老妻に菩提寺深光寺に墓参させ、自宅内に庚申を祭り、弁天を祭り、家の大事には関帝籤によって吉凶を卜し、五行説にもとづく五節を星供として星祭（北斗星供）を行なっており、滝沢家が、日常の呪術宗教的祭式を行なっており、その日常生活を多神教のシンクレティズム（諸教混淆）のなかで営んでいた、と考え、八大伝の世界を、多神教シンクレティズム・星の秘儀空間として把えておられる³¹⁾。興味深い把え方である。馬琴家の日常生活のなかの祭祀は、いままでみてきたように、世俗的なものであつて、馬琴の考え方がそこに顕現している、といえよう。

おわりに

吉田光邦氏は、化政期を採り上げられた「序説としての化政文化の構図」³²⁾のなかで、江戸の豪商で和学の学者・知識人であった小山田（高田）与清が、年中行事・慣習を取り入れた生活を営んでいて、節分・年賀・暑中見舞・花見・朝顔会・紅葉見物などを慣習とし、甲子待・神田祭・浅草鰻放生会・仏事法事などの祭祀にかかわり、与清の妻が目黒詣・開帳に出掛けていたことをあげておられる。前記のように、齋藤月岑家・

滝沢馬琴家も、年中行事・慣習を生活のなかに取り込んで営んでおり、仏事法事を執り行ない、また、世俗信仰を持ち、流行する寺社祠堂の参詣を行ない、自宅内で諸神の祭祀を営んでいた。ともに、知識人・学者というべき三人の家の祭祀に共通するところが見られるといえよう。

なお、当時、国学を学んで、儒仏を批判し、古来からの神々を崇敬し、流行する世俗信仰を排斥しようとする生活を送っていた旗本老夫人のことを瞥見して参照しよう。

この老夫人は、周知の井関隆子である。天保11年(1840)から弘化元年に至る5か年の日記³³⁾を紹介された深沢秋男氏は、元旦、年越し、鏡開き、初午、雛祭り、奉公人の出替り、更衣、灌仏会、流鏝馬、端午の節句、両国の川開き、山王祭り、四万六千日(浅草寺)、廿六夜待、重陽、事始め、媒払い、など、この時期の江戸の様子が活写されていること、江戸城中の動静が記されていること、真淵・宣長などの著書を学んで、国学的思想の影響を受け、仏者・儒者を批判していること、そのほかいくつかの要点をあげておられる。

隆子は、天保11年当時56歳、夫の親興の後妻、夫と死別し、当主親経の邸内の別棟に住んでいた。井関家は、小身の旗本(250俵)、親経は、二の丸留守居、ついで広敷用人(700俵)を務めており、城中の年中行事・祝儀に相応じた生活を営んでいた。

隆子は、井関家の祭祀の営みの墓参を行ない、また、実家庄田家の墓参も行なっているが、孟蘭会の霊棚・霊祭りに批判的で、実兄佐々木利安の7回忌に供物を送りながらも、当時の一般の法事の営み方を批判している。庚申の行事を不用なこと、えせ法師の作り物であるといい、甲子大黒神祭りについて、大国神を大黒天という仏神にしたのも法師どもの仕業であるという。いずれの祭祀も行なっていない。

隆子は、屋敷(飯田町、馬琴旧宅附近)に近い世継稻荷に、雛おろしの白酒を飲んだ酔顔で参詣して神楽を奉納したり、夏越しの祓に、同社へ参詣、奉納している。古典に傾倒する隆子は、大祓が水無月の晦日と師走の

おごそかな御業であったけれども、後に陰陽師の仕業となり、また、皆、仏に心移したので、衰えてきた、という。9月23日、飯田町の氏神の築土明神に参詣している。神田明神と同じく将門の頸を祀ることについて、漢心ともいうべきであり、山王祭礼については、踊囃子など神前に向いておもしろい業を尽してのち人々に見せるべきを、見苦しいうしろ姿のみを見せ奉っている、と批判し、また、祈事に仏語をまぜて申すのを、新しい神々は聞きわけ給うても、古い神々は、あやしいさえずりと聞し召す、ともいい、祭礼の仕方、祈禱の仕方を批判している。

家相・地相・墓相を見る生業を、無徳、浅ましい欺きであり、池に源三位頼政と書いて立て、魚を取られないようにする呪も、不用なことである、としている。将軍の酒湯（笹湯）の祝儀の折に、痘瘡の神を祀るのは、人の心によるものか、といい、人の心の惑い、と考えている。隆子（巳年生れ）は、若い頃、母が制止したけれども、鼠を追って家に入ってきた蛇を打ち殺し、巳年生れであっても何事もないと返答した、という。虫・鳥・獸を、十二辰、月、年、人にあてたのは唐人の業であり、神のように祀るのはよくない、と考えている。浅草観音の四万六千日詣も、吉原での遊興を目当に出掛ける者が多い、と批判している。

井関家は、高田の山里へ花見に行ったり、佃嶋・羽田沖などで釣を楽しんでおり、隆子も家族と同行している。隆子は、邸内で、古典に親しみ、四季折々の風情、花々に心をよせ、歌を詠むのを楽しみとしており、来客、あるいは、女主などの女衆と、酒を飲み、折々、酔いつぶれたりして、遊興している。多忙な勤仕の明きの日、当主とその来客は、将棋に興じ、酒宴を楽しんでいた。当主は、しばしば美味な献残を下賜され、家族もそれを賞味していた。

虎門の京極家が邸内に金毘羅社を、赤羽の有馬家が水天宮を祀り、あるいは、諸家が邸内に稲荷社を祀っていたけれども、井関家は、諸神を祀っていないのではないだろうか。前記のように、寺社祠堂・開帳の参詣、遊興もしていない。

隆子は、墓参に出掛け、実家庄田家の墓所が荒れているのを歎いており、先祖を崇敬し、家を意識し、時世のならいに背き難く、井関家の孟蘭盆の行事などに参加している。儒仏を批判し、世俗信仰を排斥し、神仙・呪術などを否定するなど、自分なりの考えを持っていた隆子も、家の秩序を乱すようなことは行なわず、その枠組のなかで生活し、家の祭祀、年中行事に参加していたのである。隆子は、將軍家近く城中に勤仕している井関家であることを強く意識して振舞っており、女性の果すべき役割、女性の在り方を否定したり、批判しなかった、という新田孝子・関民子両氏の指摘³⁴⁾に注目したい。

江戸の町人の家を探り上げるなかで、そうした家を参照するのはあまり適切ではないかもしれないが、斎藤月岑、滝沢馬琴両家においても、主(家君)・当主を中心とする秩序に基く祭祀に、女性(母=姑、妻=嫁)が従事しており、その役割、在り方を受け入れていた、という共通点がみられるのである。

さて、斎藤月岑家、滝沢馬琴家を事例として、都市江戸の町人の家における祭祀を検討してみた。

家における祭祀は、家によって異なっていたけれども、どの家でも共通して、先祖祭祀が行なわれていた。その執り行ない、営み方に差異があるけれども、主・当主のもと、家族揃っての参加がみられた。なかでも、滝沢家では、一段と厳密に営まれ、それが家風として続けられていた。

寺社祠堂・開帳の参詣が、当時、一般に広く行なわれているなかで、江戸の町人、あるいは町人ともいえる立場の学者・知識人、その家族も、世俗信仰を取り込み、病魔災害からのがれるために、現世利益を求めめるために、参詣しており、歳事として行なっていた。月岑は、遊興費を節減するような生活を好まず、調べもの好きでもあって、開帳に熱心に出掛けて遊興しており、馬琴は、質素儉約、規律ある暮らしのなかで、執筆などに専念し、遊興にあまり出歩かないし、開帳にもあまり関心を持たず、当主の宗伯も同様にしていた。このような差異が、家の主(家君)・当主の生き

方、考え方によってみられ、それが家族に対する枠組となっていた。家のなかの女性、姑・嫁は、それぞれの立場を守って参詣していて、主・当主ほどには出掛けず、家事・育児に従事していた。家族のなかでも、主・当主と、姑・嫁の間に、家の秩序の枠組による参詣の差異があった。また、氏神祭礼というような、都市社会・共同体の祭祀の営みには、その共同体を構成する家の当主がかかわり、家の女性は、家のなかで当主にその手伝をしたり、出掛けるのを控えるなかで、諸大社よりむしろ寺参り・祠堂参りに出掛けていた。

19世紀前半、江戸の町人は、都市社会・共同体による氏神祭礼、家における祭祀、流行する寺社祠堂・開帳参詣にみられる諸神仏混淆・呪術・卜占、娯楽の巨大な場・空間のなかで、それぞれの家の秩序の枠組のもとで生活していたのである。

表1 天保2年(1831)月峯の寺社祠堂参詣

1月	14日	神田明神神楽, 参詣。
	16	亀戸天満宮七十五膳(大御食調進) 天気合で不参。
2	5	赤羽(有馬家屋敷内) 水天宮参詣。
	10	虎門(京極家屋敷内) 金毘羅宮, 日比谷・烏森稻荷参詣。
	12	茅場町薬師堂参詣, 久次郎つれて。
	13	上野元三大師(寛永寺開山堂) 参詣。
	23	二午, 本銀町千手観音参詣, 久次郎つれて。
3	10	虎門金毘羅宮参詣。
	15	神田明神・浅草観音・待乳山聖天宮参詣, 緋縮緬着せた久次郎つれて(4月1日 疱疹発熱)。夜, 已待。
	18	上野元三大師参詣。
4	2	亀戸天満宮雨天不参。
	5	同上
	10	虎門金毘羅宮参詣。
	11	橋場朝日神明宮太々神楽, 参詣。湯嶋靈雲寺・浅草観音・待乳山聖天宮参詣。深川法善寺墓参。
	17	高田穴八幡宮代参させる。
	18	浅草観音御初穂, 曹役藤兵衛に持たせる。
	21	川崎大師参詣, 松永町名主片岡氏子息・湯嶋四丁目名主山本氏子息・岡部氏子息 同道。
	25	湯嶋天満宮参詣。
5	5	浅草観音参詣。
	9	庚申。
	10	虎門金毘羅宮参詣。
	12	浅草観音・待乳山聖天宮参詣。
	17	本銀町千手観音参詣。
	22	大圓寺齋守稻荷参詣, 久次郎つれて。
	25	浅草観音・湯嶋天満宮参詣。
6	4	千住小塚原牛頭天王祭礼, 参詣。
	5	大伝馬町天王祭礼(神田明神社地二の宮), 大伝馬町二丁目御飯屋(御旅所) 参詣。
	6	同所参詣, 久次郎つれて。
	7	南伝馬町天王祭礼(神田明神社地一の宮), 南伝馬町二丁目御飯屋参詣。
	8	大伝馬町天王還御参拜, 久次郎つれて。
	10	虎門金毘羅宮参詣。
	18	上野元三大師参詣, 久次郎つれて。
	25	浅草観音・待乳山聖天宮参詣。
	30	大師参詣, 茂兵衛同道(夏越の祓)。
7	9	浅草観音千日参, 参詣。
	10	虎門金毘羅宮参詣。
	13	王子権現祭礼, 平吉に代参させる。

-
- 7月. 25日 法善寺墓参。
- 8 . 2 浅草観音・待乳山聖天宮参詣。
 8 茅場町薬師堂参詣，久次郎つれて。
 16 神田明神・上野池の端弁天社参詣，飯塚茂太郎（甥）同道。
 20 六阿弥陀参（五番下谷広小路常楽院，四番田畑与楽院，三番西が原無量寺，一番上豊島村元木西福寺，二番下沼田延命院，六番亀戸常光寺），常光寺遅くなって不参，上田久之助・文之助，森阿弥陀法師（曇庵），森江徳右衛門，大蔵某と同道。
- 9 . 3 上野元三大師・待乳山聖天宮・浅草観音参詣。
 10 虎門金毘羅宮参詣，久次郎つれて。
 15 神田明神参詣，竹内（通新石町名主），平田（新銀町名主），飯塚茂太郎，明田勘次郎同道。
 16 神田明神参詣，久次郎つれて。
 17 浅草寺三社権現祭礼，飯塚茂太郎同道。
 22 神田明神御礼参詣。
 23 神田明神参詣。
- 10 . 1 浅草観音・待乳山聖天宮参詣。
 4 祖父幸雄居士30回忌法善寺墓参，法事8月に取越。
 9 亥子，雑煮餅拵える。
 10 虎門金毘羅宮参詣。
 14 堀之内妙法寺参詣，家族・普勝氏家族のあとから行く。
 16 雑司ヶ谷鬼子母神参詣。
 21 亥子。
- 11 . 3 上野元三大師参詣，中村屋同道。
 5 久次郎の髪置祝，神田明神参詣。
 10 虎門金毘羅宮参詣。
 12 庚申。
 13 浅草西の丁（西の市）へ行く。
 15 神田明神参詣，久次郎つれて。
 19 冬至 獅子舞二つ呼ぶ。
 28 東本願寺報恩講，参詣。
- 12 . 10 虎門金毘羅宮参詣。
 17 待乳山聖天宮参詣，浅草市へ行く。
 21 神田明神市・浅草市へ行く。
 28 薬研堀不動，風吹いて不参。
 30 神田明神参詣。
-

表2 天保年間、月岑の家族の寺社祠堂・開帳参詣

天保1年	3月	22日	祖母、母 開帳参詣、法普寺参詣。
		28	母、妻 薬研堀不動・法福寺参詣。
	閏3	18	母、法福寺参詣。
		24	母、妻 日本橋西河岸地藏参詣。
	4	18	母 法福寺・真先稻荷参詣。
		7	16 弁慶橋祖母3回忌 母 深川の寺参り。
		24	母、りん(普勝伊兵衛娘・姪) 法福寺・日本橋西河岸地藏参詣。
	10	18	母、姉(遠藤七兵衛妻)、久次郎つれて 雑司ヶ谷鬼子母神参詣。
2	1	28	母、久次郎つれて 薬研堀不動参詣。
	3	5	母、赤羽水天宮参詣。
	5	8	母、妻、久次郎・あさをつれて 浅草寺仁王尊の脰くぐりに行く。
	6	22	母、久次郎つれて 白銀町(本銀町)千手観音参詣。
	7	11	母、妻、久次郎つれて 外神田蛸燭町金毘羅大権現参詣。
	10	14	家族・普勝伊兵衛の家族 堀之内妙法寺参詣(多摩郡堀之内村)、月岑あとから行く。
		25	母 堀之内妙法寺へ、妻れんの願解に参詣。
4	2	21	月岑、母、久次郎、姉(遠藤七兵衛妻)、姪 向島蓮花寺富士本尊大日開帳参詣。
	3	23	月岑、母 浅草幸竜寺の京都本国寺開帳参詣。
	4	15	月岑、母、久次郎つれて 羅漢寺入仏(観音)供養参詣。
	7	8	母、妻、鍼三郎 浅草寺仁王尊の脰くぐりに行く。
6	2	15	母、久次郎つれて 大覚寺養王院涅槃会参詣。
	3	5	母 赤羽水天宮参詣。
		8	妻、はるつれて 浅草寺仁王尊の脰くぐりに行く。
		30	母、しげ(普勝伊兵衛娘・姪)つれて 砂村元八幡宮参詣。
	4	8	母、久次郎つれて 两国回向院灌仏会参詣。
		17	母 高田穴八幡宮参詣。
	6	5	家族 赤羽水天宮、芝神明六波羅密寺観音開帳参詣。
	8	1	母、久次郎つれて 两国回向院開帳参詣。
		28	月岑、母、久次郎つれて 駕籠1丁で目黒不動尊(滝泉寺)参詣。
	10	17	家族 浅草寺参詣。
	11	3	母、久次郎つれて 待乳山聖天宮浴油供参詣。
	12	19	母 本郷喜福寺観音参詣。
7	2	2	月岑、母 王子六阿弥陀の内4か所参詣。
	4	5	母、久次郎つれて、普勝伊兵衛家族と 泉岳寺釈迦八相曼荼羅開帳参詣。
		11	母、妻、久次郎つれて 浅草寺参詣。
	6	29	母、妻、久次郎つれて 神田明神夏越の祓参詣。
	9	26	家族一同 目黒不動尊参詣。
	10	10	母、本郷の伯母 柴又題経寺参詣。
	12	5	母 赤羽水天宮参詣。

- 天保9年、1月、5日^口 母、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
- 2 . 5 月岑、母、久徳殿(江川)、つや・久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
16 二の午、家族 津田屋敷内稲荷祭の踊り見物に行く。
23 彼岸入、月岑、母、久次郎つれて 王子辺の三十三所観音廻る。
- 3 . 5 母、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
- 7 . 6 月岑、母、久次郎つれて 两国回向院開帳参詣、化物見せ物見物する。
. 13 母、久次郎つれて 王子権現祭礼に行く。
- 8 . 5 母、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
- 9 . 4 母、久次郎・しげ(普勝伊兵衛娘・姪)つれて 堀之内妙法寺参詣。
20 母、久次郎つれて 待乳山聖天宮参詣。
- 10 . 3 母、久次郎・しげつれて 上野元三大師堂・浅草寺参詣(月岑と別行)。
5 母 赤羽水天宮参詣。
- 11 . 5 母、妻、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
- 10 . 1 . 24 月岑、母、久次郎つれて 御簗筒町鬼王権現参詣。
- 5 . 15 母、久次郎つれて 駒込寺参り。
- 7 . 9 月岑、妻子つれて 两国回向院の川崎大師開帳参詣、籠細工の七福神見物する。
30 母、しげつれて 堀之内妙法寺参詣。
- 8 . 18 月岑、母、妻、久次郎・はる・きいつれて 築地本願寺参詣。
- 12 . 5 母、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
- 11 . 3 . 3 月岑、母、久次郎つれて 築地稲荷参詣。
11 月岑、母、久次郎つれて 待乳山聖天宮浴油供参詣。
21 家族残らず 王子稲荷開帳参詣。
- 4 . 7 母、叔母、久次郎・むめ・小網町番人和介つれて 信州善光寺参詣(16日着、5月6日帰宅)。
- 6 . 5 母 赤羽水天宮参詣。
- 7 . 28 母、叔母、久次郎つれて 浅草寺・法善寺参詣。
- 8 . 5 母、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。
30 月岑、母、久次郎つれて 山手西方三十三所観音願礼。
- 10 . 13 月岑、母、叔母、久次郎つれて 谷中瑞林寺会式・浅草寺観音遷座参詣。
29 月岑、母、久次郎つれて 雑司ヶ谷鬼子母神参詣。
- 11 . 5 母 赤羽水天宮参詣。
- 12 . 5 母、久次郎つれて 赤羽水天宮参詣。

表3 天保2年(1831)馬琴・家族の祭祀

月 日	馬琴・宗伯・家内一同	妻百・嫁みち・ほか
1. 1	宗伯, 妻恋稲荷参詣。	
2	宗伯, 神田明神・深光寺・竜門寺・築土明神参詣, 伊勢内宮御師八幡太夫代御初穂乞に来宅, 200文出す。	
5	宗伯, 百同道, 水天宮参詣。	百, 宗伯に同道, 水天宮参詣。
6	庚申祭, 献供・神燈。	
7	見了院殿(初代覚伝) 祥月命日, 位牌に七草粥・菓子・餅供える。	
9	星祭, 献供, 家内一同拝禱。	
10	甲子大黒祭, 献供・神燈, 宗伯, 百, 神田明神社内大黒天参詣。	百, 宗伯に同道, 神田明神社内大黒天参詣。
12	羅文居士(兄興旨) 命日, 画像掛け神酒・菓子供える, 家廟に料供。	百, 深光寺墓参(年始)・伝通院沢蔵主稲荷参詣。
14	宗伯, 已待弁天祭, 献供。	
17	宗伯, 溜池上八天狗神縁日参詣。	
18	江の嶋岩本院から折禱札・ひじき2袋届く。	
21	見了院墓碑墓本, 亡父母・羅文居士画像掛け神酒餅供え, 汁粉餅を家廟諸靈牌に供える。鏡開。	
26	亡父母画像掛け神酒・餅供える, 初忌日(父興義命日)。	
27	亡父母画像納める(母もん命日)。	
28	宗伯 三田不動・婆の加持折禱, 参詣, さき同道, 長運寺墓参。	さき(娘・清右衛門妻), 宗伯に同道 三田不動・長運寺参り。
2. 5	宗伯, 水天宮参詣。	
8	彼岸中日, 宗伯, 三田不動婆の差図通り青山祐天寺・普光寺・同新寺参り, 即空夢幻大師(無縁仏)・月海慈眼信士(海老屋市郎兵衛 百の養父)・真室宗如居士・祐雲清信女(祐清信女? 母もんの妹)などの菩提回向を頼む。	太郎に妻恋稲荷・神田明神下稲荷参詣させる, 清右衛門に頼む。 (世継稲荷十二座神楽, 太郎行かせず, 大夙)
11	宗伯, 自宅屋敷内の稲荷に絵馬奉納(10日初午宵宮, 人手不足不参)。	
15		

月日	馬琴・宗伯・家内一同	葉百・嫁みち・ほか
2. 17	宗伯、池上天狗神參詣。	さき(施食録日世話人講中)、百、太郎つれて本郷観音參詣。
26	亡父(成正居士)命日、宗伯、みち 料供獻ずる。	
3. 7	(庚申祭失念)	
15	已待弁天祭・天王祭、宗伯獻供。	
25	成正居士祥月忌辰遠夜、昼後、画像掛け、成正・亡母の位牌置き、神酒・餅・茶飯・菊羹・汁・猪口・香物供える。銀(娘 渥見覚重妻)、粗太郎・俣吉つれて菜宅、妹 崎山伊総治妻) 菜宅。清右衛門に茶飯・平・猪口持たせる。	
26	馬琴(歩行)、百、太郎(相駕籠)、深光寺墓参、神田明神参詣。馬琴、太郎つれて 妻恋稲荷参詣(馬琴初詣)。	百、太郎、馬琴に同道、深光寺墓参、伝通院寺内沢蔵主稲荷参詣、神田明神参詣。
4. 5	(宗伯 風邪、水天宮不参)	
8	家願に餅供える。	
14	伊勢内宮御師八幡大夫使、去年類焼、昔請働化粧持参、200文出す。	
16	馬琴、太郎つれて、清右衛門方へ年始、世継稲荷参詣。	
21		
26		
28	宗伯、竜門寺(牛込 百の黨父母海老屋市郎兵衛菩提寺) 墓参。	みち、太郎、次つれて、神田明神講中太々神楽参詣。 成正居士命日、百、深光寺墓参。
5. 5	端午の節、諸神家廟献供。馬琴、百、宗伯同道 水天宮参詣。	みち、太郎、次つれて、清右衛門方へ、了海信女(百養母・叔母) 37回忌。清右衛門長屋中へ茶飯遣す。一統清右衛門方で茶飯食す。
7		百、馬琴、宗伯と同道、水天宮参詣。 (百、太郎つれて、本所正木稲荷参詣中止、日柄よくなりなく差留)
9	庚申祭、献供。	
12	甲子大黒祭、献供。	

葉百・嫁みち・ほかの生活にみる習俗

月 日	馬琴・宗伯・家内一同	妻百・嫁みち・ほか
5. 13	宗伯, 神田明神社内大黒天参詣。	
14	星祭, 献供, 家内一同拝禱。	
17	巳待弁天祭, 宗伯執行, 献供。宗伯 溜池上八天狗神参詣。	百, 宗伯, さき同道, 堀之内妙法寺参詣。
24	宗伯, 百, さき同道 堀之内妙法寺参詣。	成正居士命日, 百, 深光寺墓参。
26		百, 宗伯, みち, 太郎・次・下女まきつれて正木稲荷参詣。
28	宗伯, 百, みち, 太郎・次・下女まきつれて, 正木稲荷参詣。	
6. 1	江の崎弁天本社建直し勤化帳, 清右衛門持参, 金1朱ずつ記帳。	
5	馬琴, 太郎・次つれて, 神田明神参詣, 天王神輿出るを見物。	
7		百, 太郎をだまし, 神田明神参詣, 小船丁天王神輿出るを見物させる。
9		百の実母妙貞尼祥月命日, 朝料供。夕方, 百, 太郎つれて清右衛門方へ, さきから茶飯・平・なますを買う。
15		下女まき添えて, 太郎, 次, 神田明神参詣させる。
26	惠正(仁母) 祥月連夜, 茶飯料供献備, 手伝に, 祐(娘 田久右衛門妻), ます, てつをつれ, 久右衛門, さき同道して来宅, 妹菊(田口久吾妻) 来宅, 一同に茶飯・1汁3菜振舞う, 清右衛門方へ茶飯・平・猪口など遣す。地主へ2膳, めでたや養母へ1膳, 料供とも17人前。成正・惠正両画像掛け, 神酒・供餅・甜瓜など献備。	
27	馬琴, 百同道, 深光寺墓参, 位牌堂で焼香。	百, 馬琴に同道, 深光寺墓参。
29		清右衛門, 世継稲荷, 夏越ひながら1つ持参。
晦日	宗伯, 燈籠張替。	
7. 2	金華山弁天旅所祈禱礼届く, 御初穂100文使へ渡す。	百, 太郎つれて, 妻恋稲荷参詣。
7		百, さきの迎えに同道, 久右衛門, 祐, ます, てつ, 牛込揚場から筋違外に屋根始を待ち, 亀戸妙見・浅草観音参詣, 終日舟行。
9		

月日	馬琴・宗伯・家内一同	養百・娘みち・ほか
7. 10	庚申祭、献供。	
11	馬琴、百、太郎と浅草西照寺(外祖母妙康信女)墓参、浅草観音参詣、今戸養養寺(外祖父寛重信士)墓参、寺へ盆供施入。	百、馬琴に同道、太郎つれて、西照寺・慶養寺墓参、盆供施入、浅草観音参詣。
12	馬琴、池之端七軒町福常寺栢清信女墓参、寺へ香奠10疋納める。馬琴深光寺盆供米銭1包、清右衛門に託す。	百、深光寺・竜門寺・円福寺墓参。清右衛門深光寺盆供持参の由来宅。
13	宗伯、諸靈祭盆中棚記る。靈棚迎団子、越後鈴木牧之より到来の寒ざらし白玉粉と7日購入の寒ざらしもち粉で作って供える。馬琴、深光寺墓参。六半時玄閻前迎火をたく。夕方より馬琴、百精進。	百、馬琴とともに、精進。
14	諸靈へ朝昼夕3度料供献備。甲子大黒祭、七色菓子・燈明献ず。馬琴、百、精進。	盆中料供手伝のため、久右衛門娘ます清右衛門方に止宿。百、馬琴と精進。
15	深光寺所化棚程に來宅、布施半纏(500文弱)納める。馬琴、百、精進。宗伯、みち、太郎に生身魂祝儀、昼の膳に魚肉食べるよう申付ける。	百、馬琴とともに、精進。みち、太郎、宗伯とともに生身魂、昼の膳に魚肉食べるよう馬琴から申付けられる。
16	靈棚朝料供献備、終えて挽茶献ず、四時持仏壇へ奉納、宗伯顔を撤去、夕方、玄閻前送火、盆祭終える。未時、星祭、献供。	
18	巳待、宗伯、弁天祭、献供、夕方祭る。	
25		
26	成正居士命日料供献備、瓜・茄子高直、二番献漬漬庵大根の橙口あけて供える。	
29	盆燈籠、夜撤去。	
8. 1	叔父米岳翁・住要院日実17回忌、牛込円福寺墓参、清右衛門・さきに名代を申付け、香奠100文・花代渡す、さき参詣の由。	
4	滋正信士(兄、興春)祥月忌、料供献備、家内終日精進。	
5	宗伯、百、水天宮参詣。	百、深光寺墓参。
11	羅文居士洋月連夜、茶飯、朝から画像を座敷床間へ掛け神酒・供餅・葡萄など供えて祭る。馬琴、深光寺墓参。羅文居士位牌、慈正信士位牌	百、宗伯と同道、水天宮参詣。 さき來宅、羅文居士献備の蠟燭・黄瓜、手土産持参、清右衛門へ茶飯など持たせる。病、腫物不参。くわ、祖太郎。

月 日	馬琴・宗伯・家内一同	美百・嫁みち・ほか
	<p>に茶飯、1汁3菜1膳ずつ供える。地主杉浦へ2膳、めでたや庄兵衛養母へ1膳、清右衛門へ1膳遣す。山田吉兵衛へ平・膳・猪口を小重に入れて、秀に持たせる。</p>	<p>梯吉つれて来宅。秀来宅、秀、新大さつまいも羅文居士へ献儀。</p>
8. 12	<p>羅文居士祥月命日、位牌に朝料供献儀、終日画像祭る。家内一統精進。宗伯、百、みち、太郎、次、下女まきつれて 深光寺墓参。</p>	<p>家内一統精進。百、みち、太郎、次、下女まき、宗伯と深光寺墓参。さき、きく、同墓参。</p>
15	<p>八幡祭礼、鎌倉・深川八幡、神額かけ神酒・供餅供えて祭る。月見、赤豆団子・きぬかつぎ芋・枝豆など家廟へ供え、家内一統祝う。馬琴、宗伯 賀月。</p>	
16		<p>金沢町加波山行者加持折壽、百の頭痛平癒のため日々来宅。</p>
19	<p>百へ回向料1朱渡す、善光寺・祐天寺への布施。</p>	<p>一週り7日に及ぶ、7日間精進。4、5日来少し眼疾の由。百、久右衛門と約束の善光寺・祐天寺参詣、妙貞尼・祐雲信士(祐清信女?)・真室宗如・和相満父子3人・即空夢幻(無名氏女)回向(回向料1朱)、布施200文ずつ阿寺へ納める。目黒不動参詣。清右衛門彼岸中日志の手製牡丹餅一重持参。</p>
20	<p>彼岸中、白玉粉製の団子家廟惣靈位に供える。</p>	<p>久右衛門、祐、2人の子供つれて深光寺墓参、来宅。</p>
25		<p>菊、男子田口栄太郎つれて来宅、食初宮参、少女2人、供の間1人同道。</p>
28		<p>百、みち同道、太郎、次つれて、妻恋稲荷・神田明神参詣。</p>
9. 9	<p>金彦山別当所より折壽札来る。初穂100文出す。</p>	
11	<p>庚申祭、献供・燈明、夕四時奉祭。</p>	
13	<p>後の月見、赤豆団子・いも・栗・枝豆など一式家廟へ供え、家内一統祝う。冷気賀月せず。</p>	
15	<p>甲子大黒祭、献供。</p>	<p>百、みち、太郎、次、下女まきつれて、神田明神社内大黒天参詣。</p>

月 日	馬琴・宗伯・家内一同	妻百・嫁みち・ほか
9. 18	星祭, 朝四時献供, 家内一統奉祭。	
19	昼後, 弁天巳待祭, 夕方献供, 宗伯祭る。	
20	宗伯, 夜食後, 清右衛門方へ止宿, 21日の神田明神祭礼見物のため。	百, みち, 太郎, 次つれて, 飯田町宅 (清右衛門方) 止宿, 21日の神田明神祭礼見物のため。宗伯も止宿, 四谷の田辺久右衛門, 祐, 子供つれて同宅止宿, 止宿客11人。百など止客祭礼残らず見物。清右衛門, 赤飯・煮栗・餅・菓子など来宅する久右衛門に持たせる。
21	宗伯ら, 祭礼残らず見物 (馬琴風邪)。	
25	妙岸普女 (祖母) 祥月忌日料供, 昼飯に供える, 終日精進。	
27		
10. 1	今夕吉日, 未時吉辰, 弁才天大野子を東3畳間辰の方へ移し (押入から), 神酒供菓など供えて祭る (宗伯朝から掃除)。	田口久吾より男子栄太郎宮参祝儀・赤飯一重贈られる。
14	宗伯, 百, みちと同道, 太郎, 次つれて, 深光寺参, 雑司ヶ谷鬼子母神参詣。	百, みち, 宗伯同道, 太郎, 次つれて深光寺参, 雑司ヶ谷鬼子母神参詣。
19	朝五時星祭, 献供, 家内一統拜禱。	
27		
28	唯祿居士 (興也) 祥月, 朝, 料供奉祭。	田口久吾より養父覚源居士来る晦日17回忌の由宗伯へ使札, 大饅頭一重の内15個贈られる。
11. 5	馬琴, 宗伯同道, 水天宮参詣。	昼後, 百, 深光寺参。
12	庚申祭, 献燈。	
13		
16	甲子大黒祭, 献供, 夜, 宗伯, 百と同道, 神田明神社内大黒天参詣。	百, 太郎つれて広沢寺参詣 (さきの旧主立花家奥方参), 浅草観音・鷲大明神参詣。
19	冬至, 汁粉餅作らせる, 家願へ献供, 終えて家内一統祝う。地主杉浦家へ汁粉餅遣す (両三度贈物の答礼)。	百, 宗伯同道, 神田明神社内大黒天参詣。

新編 日本書紀 卷之四十五 孝德天皇 孝德天皇 孝德天皇

月日	馬琴・宗伯・家内一回	妻百・嫁みち・ほか
12. 20	巳待弁天祭、宗伯献供、夜四時、星祭。	百の養父慈眼居士祥月忌、百、さき同道、竜門寺墓参。清
24	慈眼居士祥月忌料供献備。	右衛門方から茶飯・平・猪口到来。
26		百、深光寺墓参。成正居士命日。
11	伊勢外宮御師岡村又太夫より、大祓・新曆・鬘斗・箸・書状到来。	
12	宗伯、羅文居士靈前に料供献備。	
17	貞教大姉祥月忌辰、昼料供献備、奉祭。	
19		瀝見祖太郎袴着社参、神田明神参詣。
20	本郷笹屋餅持参、小餅を自在餅につくり家廟へ供え、家内一統祝う。地主・めでた屋・清右衛門方などに遣す。夜、四時、星祭、献供。	
25	深光寺へ歳暮供3種1包、清右衛門に持参させる。	
27	伊勢内宮御師八幡太夫より御初穂乞いに来る、200文出す。	百、深光寺・竜門寺墓参。

註

- (1) 三田村鳶魚氏編『江戸年中行事』（1927年1月 春陽堂），同朝倉治彦氏校訂『江戸年中行事』（〈中公文庫〉1981年11月 中央公論社）。
- (2) 斎藤月峯編著，朝倉治彦氏校注『東都歳事記』1・2・3（〈東洋文庫〉1970年3月，12月，1972年11月 平凡社）。
- (3) 西山松之助氏「江戸の町名主斎藤月峯」（西山松之助氏編『江戸町人の研究』第4巻所収 1975年6月 吉川弘文館）
- (4) 宮田登氏「江戸歳時記—都市民俗誌の試み—」（1981年7月 吉川弘文館），「江戸町人の信仰」（西山松之助氏編『江戸町人の研究』第2巻所収 1973年5月 吉川弘文館），『近世の流行神』（1972年1月 評論社），「江戸の小さな神々」（1989年3月 青土社）。
- (5) 真山青果氏「随筆滝沢馬琴 付 林子平の父」（『真山青果随筆選集』第1巻 1952年11月 大日本雄弁会講談社）。
- (6) 藤田徳太郎氏「解説」（斎藤月峯著，藤田徳太郎氏校訂『声曲類纂』〈岩波文庫〉1941年4月 岩波書店）。斎藤武雄氏「江戸市井人—月峯伝—」（一）～（九）（『青芝』107～115号 1962年9月～1963年5月）。山田清作編『武江扁額集』解説，「江戸名所図会畫稿」解説（稀書複製叢書『稀書解説』同第三編所収 1920年6月 1924年10月 米山堂）。森銃三氏「斎藤月峯の随筆」（『書物展望』1933年3月 『森銃三著作集』第11巻所収 1971年10月 中央公論社）。鈴木章生氏「斎藤月峯の江戸認識—著作刊行物の性格分析を通して—」（立正大学『大学院年報』5号 1988年2月）。保崎直子氏「天保期における江戸名主と寄合」（平成2年度聖心女子大学大学院修士論文 1991年1月）。
- (7) 森銃三氏「斎藤月峯日記鈔」（『本道楽』第14巻3号～第17巻1号，1933年1月～9年5月），『斎藤月峯日記鈔』（1983年6月 汲古書院）。西山松之助氏翻刻・解説「斎藤月峯日記抄録」（『東京教育大学文学部紀要』71 1969年3月）。東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 斎藤月峯日記』一，二，（1997年3月 1999年3月 岩波書店）。
- (8) 前掲 森銃三氏『斎藤月峯日記鈔』。西山松之助氏「江戸の町名主斎藤月峯」。宮田登氏「江戸歳事記」。
- (9) 以下日記の注記を省略する。月峯の日記は，『大日本古記録』所収のもの，聖心女子大学図書館架蔵の東京大学史料編纂所マイクロフィルム紙焼コピー『斎藤月峯日記』1～36を使用する。
- (10) 前掲 森銃三氏『斎藤月峯日記鈔』。
- (11) 前掲 西山松之助氏「江戸の町名主斎藤月峯」。

- (12) 拙稿「江戸の町内と山王神田両祭礼」(『聖心女子大学論叢』87 1996年8月)。なお、「天下祭」(東京市史外篇 第四 1939年3月)、牧田勲氏「神田明神祭礼留書」(『攝南法学』15 1996年2月)、『新編 千代田区史通史編』(1998年6月)第三編 近世 第7章第7節「天下祭」なども参照できる。
- (13) 前掲 西山松之助氏「江戸の町名主斎藤月岑」。
- (14) 同論文。なお、開帳については、比留間尚氏「江戸の開帳」(前掲「江戸町人の研究」第2巻所収)、『江戸の開帳』(1980年10月 吉川弘文館)を参照した。
- (15) 饗庭筵村氏編・芳賀矢一氏ほか7人論評「馬琴日記鈔」(1911年2月 文会堂書店)。関根正直氏「曲亭馬琴の家庭及び生活」(『隨筆からすかご』所収 1927年10月 六合館)。
- (16) 前掲 真山青果「隨筆滝沢馬琴 付 林子平の父」。
- (17) 麻生磯次氏「滝沢馬琴」(『人物叢書』1959年11月 吉川弘文館)。なお、執筆料については、服部仁氏「馬琴の収入」(『曲亭馬琴の文学域』第2部第2章1 1997年11月 若草書房)も参照。
- (18) 小池藤五郎氏「手紙・日記・家記の検討による滝沢馬琴の周辺」上・下(立正大学「文学部論叢」第36号・40号 1970年1月 1971年7月)。柴田光彦氏「馬琴の日常生活」(中村幸彦・水野稔氏編「秋成・馬琴」『鑑賞日本古典文学』第35巻所収 1977年2月 角川書店)。
- (19) 柴田光彦氏「滝沢家『盆祭諸行事』付『馬琴日記』菩提寺・法名索引」(松尾靖秋氏編「近世文学論攷 研究と資料」所収 1985年8月 桜楓社)。
- (20) 高田衛氏「八犬伝の世界—伝奇ロマンの復権—」(『中公新書』1980年11月 中央公論社)。
- (21) 暉峻康隆氏ほか編集・校訂「馬琴日記」第1～4巻(1973年5月～11月 中央公論社)、以下、日記の注記を省略する。
- (22) 前掲 真山青果氏「隨筆滝沢馬琴」に、天保2年の日記によって、正月中の神仏行事を列記してある。
- (23) 滝沢馬琴著、木村三四吾氏ほか編集校訂「吾仏乃記—滝沢馬琴家記—」(1987年12月 八木書店)。
- (24) 浜田啓介氏「都市生活と家—『吾仏乃記』における家の問題—」(林屋辰三郎氏編「化政文化の研究」『京都大学人文科学研究所報告』所収 1976年3月 岩波書店)。
- (25) 前掲 柴田光彦氏「滝沢家『盆祭諸行事』 付『馬琴日記』菩提寺・法名索引」。

- (26) 浜田啓介氏は、「近世小説・営為と様式に関する私見」(1993年12月 京都大学学術出版会)の「吾仏乃記の世界と『南総里見八犬伝』」に、馬琴が家霊の追善供養を怠らず勤め、それを後代に伝えようと『吾仏乃記』を誌し、「八犬伝」にも仏事を丁寧に記して、先祖父母兄弟のため仏事法会を修すること孝子に欠くべからざるものとして、『吾仏乃記』の世界を入れ込んでいる、と論述しておられる。興味深い指摘である。
- (27) みちについては、木村三四吾氏が、「近世物之本江戸作者部類」(1988年5月 八木書店)の黙老方筆本についての論述のなかで書かれていて興味深い。また、杉本苑子氏が『滝沢みちと只野真葛』(円地文子監修、清水好子氏ほか編集「人物日本の女性史 第10巻 江戸期女性の生きかた」所収 1977年12月 集英社)に、採り上げておられる。
- (28) 柴田光彦氏「江戸の知識人と古い一馬琴と方位・吉凶をめぐって」(『歴史読本』21 1975年12月)、のち、「馬琴と方位・吉凶をめぐって」(『歴史読本』臨時増刊「易学・天文学・占星術」に再収 1992年3月)。滝沢馬琴「改過筆記」(国書刊行会編「続燕石十種」第二所収 1909年3月)。
- (29) 前掲 「吾仏乃記」。
- (30) 「後の爲の記」(国書刊行会編「曲亭遺稿」1911年3月)。
- (31) 前掲 高田衛氏「八犬伝の世界」。
- (32) 吉田光邦氏「序説としての化政文化の構図」(前掲 林屋辰三郎氏編「化政文化の研究」所収)。
- (33) 深沢秋男氏校注「井関隆子日記」上・中・下(1978年11月 1980年8月 1981年6月 勉誠社)、同氏「桜山文庫所蔵『天保日記』とその著者について」(『文学研究』42 1975年11月)、「井関隆子日記」上 解説。ほかに、同氏「井関隆子研究覚え書」1～5(『文学研究』44・46・53・56・72 1976年12月 1977年12月、1981年6月 1982年12月 1990年12月)、「井関隆子の人と文学」上(『文学研究』86 1998年4月)などが参照できる。
- (34) 新田孝子氏「井関隆子の文芸一館蔵『さくら雄が物かたり』の著者一」(東北大学附属図書館「図書館学研究報告」13 1980年12月)。関民子氏「天保改革期の一旗本女性の肖像」(林玲子氏編「日本の近世 15 女性の近世」所収 1993年11月 中央公論社)。